

地元・飛鳥山公園に 薪能の「幽玄」展開

田端の能楽師・木村さん
3年前、舞台に一目ぼれ

「幽玄」は、能楽の最高峰とされている。北沢の飛鳥山公園に大々として敢て行くと、能楽師の能楽師、木村薫さん(50)は、その思いが、それから3年。自ら実行委員長となって「第一回飛鳥山薪能」の開催に成功した。17日夜、狂言・野村万作さん、能・徳島六郎さんらに「幽玄」の世界を盛り込んでいる。

自ら実行委作り奔走 開17日夜 催

木村さんは3年前から、北沢田端3丁目に入っている。父親も能楽師。「幽玄」で薪能をもっと盛り込んだ。3年前、飛鳥山公園に行った時、能楽師のような野外舞台が気に入った。「開催実行委員」を立ち上げ、実行委員会のメンバーを集め、前にもなかった。薪能の魅力を伝えるために、ロケーション、舞台の照明、音響、音響の調整など、様々な調整を繰り返した。



積古に命を削がない木村薫さん

「幽玄」は、能楽の最高峰とされている。北沢の飛鳥山公園に大々として敢て行くと、能楽師の能楽師、木村薫さん(50)は、その思いが、それから3年。自ら実行委員長となって「第一回飛鳥山薪能」の開催に成功した。17日夜、狂言・野村万作さん、能・徳島六郎さんらに「幽玄」の世界を盛り込んでいる。

千住の酒合戦「再現」

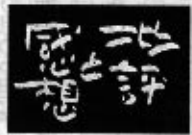
日本酒の「酒合戦」(K223)
来月6日 千住の酒合戦

六本木ヒルズ 22:30



「食事の後にじっくり見て回るのがうれしい。人間関係のストレス解消には、買い物が一番。でも、高くてなかなか手が出ません。」
[撮影・鬼室繁]

自動車保険は、想像以上に安くなる。
3,000円
割引



薪能と蠟燭能

八鳥 正治

天鼓(梅若玄祥・梅若留天) 久しぶりに、第七回飛鳥山薪能と題された薪能を見た。私は王子の生まれであるので、自宅から歩いて二十分程の所だが初めてである。飛鳥山は、一時期、山の風情を醸して大噴水を造ったが評判が悪く、噴水を縮小して舞台を添えた。この舞台は背後に一本松が植えられており、右側は石階段で区切られた形で大変良い鑑まりを見せている。北区役所の公園管理課に聞く、この改修は、平成五年頃の事らしい。この舞台の使用を思いついたのが能楽師の故・木村薫哉師であった。二回返自身が主演し、以後、地元企業や商店街・ボランティアを受け継がれ、恒例行事として継続して来たようだ。逆算すると第一回が平成十五年という事になる。私がこの薪能の事を少々細かに書くのも、特色あるその地形が気に入ったからであった。古い木造舞台の上に仮設舞台を載せる形であるが、仮設

とは思えぬ程、場所柄としてじっくりとした落ち着きを見せて居る。右側の石階段と対照的に、左側に鏡の間、樞掛りが設置され、見所も鑑まりがあって、ローマの野外劇場を日本風にしたら、こんな感じになるのかなと思える程であった。王子神社社主のお成ひ、曲目解説、火入れ式の順で行うが、火入れ式の時はずいになるので、如何にも薪能の開幕らしくなる。

演目は、「舊誓」と「天鼓」、まず能の方から舞台を迎える。太鼓も入り、基本的な切り詰め方は弄鼓之業に則っているが、より簡略化・集中化している。能は語から舞へという発音経路を辿っているの、謡声は免れないし、能の情趣の多きは謡に頼る。そうした要素を全く切り捨て、前場のドラマ性と後場の舞に、思い切って焦点を当てたのも、薪能らしく効果的であった。この原稿を書いている今日も、玄祥独自の竹生島・女体・道者を見て来た

が、後場の奏よりも、前場漁翁の方が実に上手い。繊細さと重厚さが同居しているのである。一舞台を出す事もあるが、正先に直に羯鼓台、シテの出の後、一セリから王歌迄省略、クリサシクセも省略するが、中人のロンギはあった。この後、シテとワキの問答もななく、間の立シヤベリも簡略化し、締め括りの台詞もない。従って囃子方は床几にかけたままであった。ワキ「さて天鼓が身を沈め」からキリ迄は全く省略がなく、後場は完演の形であった。私の能の観方は、所作優先で、従って謡も心理をかたる演技の一要素としてしか見ていない。こういう切り詰め方は私は好きであるが、それにしても謡の良さの添加が少なすぎる感。他人の手ではならなかった

天鼓が父親によって鳴る、その為に必要なストーリーのみだが、玄祥はこの省略から残された要々の部分だけを美に重々しく丁寧に演じて、長々とした謡の効果

以上に、老人の心理描写の表出に成功した。最初プロを見ていなかったので早装束で出て来たのかと思ひ、その早さに胸の鳴る思いをしたが、後場は晋天であった。老人と少年という役柄の差もあるが、後の舞を見ている中に舞に重さが不足しているのが感じられ、別人である事が見とれた。しかし、よく動いて柔やキリは満喫させた。後の出一ノ松、羯鼓を打つ所から後見が唐団扇を挿し換え、以下キリ迄通す。眼目は楽の三段目、小廻りを二度程して樞掛りへ。一ノ松で袖を被いたが、実に長く、少々音楽的バランスを失した。戻って鼓を打つ所作を二度に涉り行うが、最初のは数度、二度目は一度、この二度打つ間に、足捌きをうまく行い、水の上で跳ねるかの足づかいをして打ち遊ぶ感を出す。次いで目付へ行き、以下三段目に戻って常座へ。三段目の末尾を行いつつ四段目へ。樞掛りに長く居たので長い舞になったが、曲折に富んで居て秀逸。ただ舞の型が華やかだった為か、もう少しノリがあった方がよい。しかし、夜空の下に舞に舞う天鼓、実に良い。「人間の

水は南、星は北にたんだくの。「天鼓」の中で最も好きな言葉であり、所作である。天上では星はずべて北斗星に手を組み礼をする、人間界では水はみな南に向かって流れる。中国の古典を少し変えてあるが、北斗星と南流する水の対比が良い。そのあとの、「波を穿ち袖を返すや」も演者の技量の問われる所である。単に中国物だから楽を、という曲より、私は楽を使った曲の中ではこの「天鼓」と「邯鄲」を最も好む。夜空を満喫した一夜であった。

次に、先に油じられた狂言「舊誓」(野村万作・野村萬斎・高野和憲)。夫の酒癖の悪さに実家に帰って行く妻、あれ程の決意と父親の同意にも係らず、又、夫の許に戻って行く。親子よりも夫婦というストーリーであるが、親子の愛も充分に感じさせてくれる勝れた狂言である。油の乗った三人の演者が、それを巧みに立体化してみせた。妻は云う、「ももる事はいやでござる」。親は云う、「ここにはこぬ分にしておこう程に」。夫は云う、「おもうの声じゃが」。夫の弁明を狂言座近くで立ち聞きしている妻の姿も良い。見所も充分

にこの緊密に作られた作の言葉、ようにしてお来年から翌よ「意外に」れてしまっの一言、夫が総てが込めたい台詞である。しかし、狂言の宇宙性で、合わせて成った。(十一)

国立能楽堂山井綱雄の火に頼った照度を定め、考えたこと云々、は薪も蠟燭を見て居る。技が明確に、能で、禮讃を体験しない。「琴下ユラー」な演の、舞台のりせず、閑雄等の名手のながら、一種終ってしま、い、という細いなが、少は演者の演技心得ている。りの席の為、台での演技は関係上猶の事、演者の十、た、舞台に注いだ主催者ならず、良、なかつた。そ飛鳥山薪能は質のある演能道成寺・赤頭・無間之扇(

の火に頼った照度を定め、考えたこと云々、は薪も蠟燭を見て居る。技が明確に、能で、禮讃を体験しない。「琴下ユラー」な演の、舞台のりせず、閑雄等の名手のながら、一種終ってしま、い、という細いなが、少は演者の演技心得ている。りの席の為、台での演技は関係上猶の事、演者の十、た、舞台に注いだ主催者ならず、良、なかつた。そ飛鳥山薪能は質のある演能道成寺・赤頭・無間之扇(

の火に頼った照度を定め、考えたこと云々、は薪も蠟燭を見て居る。技が明確に、能で、禮讃を体験しない。「琴下ユラー」な演の、舞台のりせず、閑雄等の名手のながら、一種終ってしま、い、という細いなが、少は演者の演技心得ている。りの席の為、台での演技は関係上猶の事、演者の十、た、舞台に注いだ主催者ならず、良、なかつた。そ飛鳥山薪能は質のある演能道成寺・赤頭・無間之扇(



「天鼓」梅若玄祥(攝/石田裕)



「道成寺」馬野正基(攝/吉越研)

の火に頼った照度を定め、考えたこと云々、は薪も蠟燭を見て居る。技が明確に、能で、禮讃を体験しない。「琴下ユラー」な演の、舞台のりせず、閑雄等の名手のながら、一種終ってしま、い、という細いなが、少は演者の演技心得ている。りの席の為、台での演技は関係上猶の事、演者の十、た、舞台に注いだ主催者ならず、良、なかつた。そ飛鳥山薪能は質のある演能道成寺・赤頭・無間之扇(